

令和6年 9月30日	病害虫発生予報 10月号	茨城県病害虫防除所
---------------	-----------------	-----------

イネ縞葉枯病対策のため、水稻の収穫後はすみやかに耕起し、 ひこばえ（再生稲）をすき込みましょう

< 目 次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：ハダニ類	1
抑制トマト：黄化葉巻病（タバココナジラミ）	1
○促成トマトでもタバココナジラミの防除を徹底しましょう。	2
秋冬ネギ：ネギハモグリバエ	2
秋冬ネギ：ネギアザミウマ	3
共通害虫：シロイチモジヨトウ	3
共通害虫：オオタバコガ	4
○ナシ黒星病の秋季防除と落葉処理を徹底しましょう！	4
○ナシ炭疽病の発生による早期落葉が見られます	5
○フェロモントラップへのトマトキバガの誘殺が認められています。	6

【その他の病害虫】

ナシ、ブドウ、果樹共通、イチゴ、ハクサイ、共通害虫	7
○サツマイモ基腐病の防除対策（収穫期～貯蔵期）	8

【防除所レポート】

令和6年の水稻における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応	9
--------------------------------	---

II. 今月の気象予報 11

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel : 0299-45-8200

ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、寄生葉率（本年値 12.0%、平年値 3.4%）は平年並～やや高く、発生地点率（本年値 20%、平年値 26%）は平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生が少ないうちに防除を徹底する。特にビニル被覆後はハウス内が増殖に適した環境になるので注意する。
- ② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

抑制トマト

1. 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月上旬現在、発病株率（本年値 40.7%、平年値 2.1%）、発生地点率（本年値 100%、平年値 40%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ③ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミ成虫を捕殺する。
- ④ タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。タバココナジラミの薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑥ 黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染しても発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。
- ⑦ 雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。また、野良生えトマトは伝染源となりやすいので見つけ次第処分する。

（令和 6 年 8 月 20 日発表 病害虫速報 No. 8 参照）

促成トマトでもタバココナジラミの防除を徹底しましょう。

トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミが媒介するウイルス病です。発病してからの治療はできないため、タバココナジラミの防除が重要です。

本年は、抑制トマトにおいて黄化葉巻病が平年より多く発生しています。本病は前作の促成トマト（令和5～6年）でも多くの発生を認めました。そのため、育苗期から本圃初期のタバココナジラミの防除を徹底し、生育初期のウイルス感染を防ぎましょう。

〔防除上注意すべき事項〕

- ① 生育初期に感染すると被害が大きくなるため、育苗期から本圃初期の定期的な薬剤散布および定植時期の薬剤処理により、タバココナジラミの防除を徹底する。
- ② 定植前に苗をよく観察し、新葉の退緑がみられる苗やタバココナジラミが発生している苗を本圃に持ち込まないように注意する。
- ③ その他の「防除上注意すべき事項」は、前ページの抑制トマトに記載してある事項に準じて行う。

秋冬ネギ

1. ネギハモグリバエ

〔予報内容〕

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

〔予報の根拠〕

- ① 9月下旬現在、被害度※（本年値20.2、平年値8.0）は平年よりやや高い～高く、発生地点率（本年値67%、平年値87%）は平年よりやや低い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

〔防除上注意すべき事項〕

- ① 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ② 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

(ネギ 続き)

2. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、被害度※(本年値 36.0、平年値 36.0)は平年並、芯葉の被害株率(本年値 96.4%、平年値 87.6%)は平年並～やや高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。
※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

共通害虫

1. シロイチモジヨトウ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近 1 か月間(8月 26 日～9月 25 日)のフェロモントラップへの誘殺数は、笠間市およびつくば市で平年より多い。
- ② 9月下旬現在、秋冬ハクサイ、冬レタス、秋冬ネギの圃場で発生を認めている。
- ③ 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 中齢以降になると薬剤の防除効果が劣るので、圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努め、防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、幼虫が結球内に食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、出入口も含めてハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 令和 4 年度に主要薬剤の殺虫効果について試験を行ったので参考にする。

(令和 5 年 2 月 24 日発表 病害虫発生予報 3 月号 p3-4 防除所レポート参照)
(令和 6 年 7 月 31 日発表 病害虫速報 No. 7 参照)

(共通害虫 続き)

2. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間(8月26日～9月25日)のフェロモントラップへの誘殺数は、土浦市および龍ヶ崎市で平年よりやや多い～多く、坂東市で平年よりやや多く、筑西市で平年並である。
- ② 9月下旬現在、大豆、秋冬ハクサイ、夏秋ナスの圃場で発生を認めている。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 中齢以降になると薬剤の防除効果が劣るので、圃場をよく観察し、若齢幼虫の早期発見に努め防除を徹底する。
- ② 結球葉菜類では、幼虫が結球内に食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ③ 施設栽培では、出入口も含めてハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップの誘殺状況を公開しているので参考にする。

ナシ黒星病の秋季防除と落葉処理を徹底しましょう！

黒星病は、今年度は5月上旬から発生が認められ、5月以降、葉、果実ともに平年並～やや少ない発生でした。また、9月下旬現在、一部圃場では秋型病斑が認められています。翌年の伝染源を減らすため、秋季防除・落葉処理を徹底しましょう。

【防除対策】

① 落葉前の薬剤防除

黒星病の秋型病斑は、9～10月にかけて認められ、病斑上に形成された分生子は、10～11月の降雨により枝を流れ落ちてりん片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、収穫終了後から落葉前までの秋季防除を徹底する。重要な防除時期は、秋型病斑の発生が増加する9月中旬～10月、りん片生組織の露出が多くなる10月中旬～11月上旬ごろである。薬剤の散布は、2週間間隔で2～3回程度実施する。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤーの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

② 落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上に形成された子のう胞子は、翌年の3～5月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めて適切に処分する等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。この作業ができない場合、落葉をロータリで土中にすき込むことでも効果が期待できる。

ナシ炭疽病の発生による早期落葉が見られます

近年、梅雨明け後の8月以降、「豊水」、「なつしずく」、「新高」等で炭疽病が多発生し、早期落葉が見られます。

今年度は、9月以降に県西、県南地域を中心に県内全域で発生し、一部圃場で早期落葉が認められています。

【病気の特徴】

本病は葉（葉身及び葉柄）に発生し、果実には発生しない。はじめ葉身部や葉柄部に直径0.5～1mm程度の微小黒点を生じる。葉身部の斑点はその後拡大し、直径2cm程度の大型病斑になる。発病葉はやがて黄化し、早期落葉する。

病原菌は、糸状菌の一種で、罹病葉及び花芽で越冬し、分生子は花芽（枯死りん片部）では春先に、落葉では梅雨期に形成され、飛散し伝染源となる。6月～7月に曇雨天が続くと多発生し、落葉期まで発生は拡大する。「豊水」、「なつしずく」、「新高」では多発生し、「幸水」、「あきづき」ではほとんど発生しない。

【防除対策】

- ① 本病原菌は、罹病落葉で越冬して翌年の伝染源となるため、落葉は集めて適切に処分する等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。
- ② せん定時に被害の激しかった枝を優先的にせん除するとともに、側枝の花芽整理を行う。
- ③ 次年度以降、5月～7月頃に薬剤防除を行う。



葉に発生した黒点病斑（表）



葉に発生した黒点病斑（裏）

フェロモントラップへのトマトキバガの誘殺が認められています。

トマト等でのトマトキバガの発生に注意しましょう

トマトキバガは、近年、日本に侵入してきた新しい外来害虫で、ナス科の植物を好み、トマト等を食害します。

茨城県では、令和5年10月にフェロモントラップ調査において、初めてトマトキバガ成虫の誘殺が認められ、本年も、9月にフェロモントラップへの本虫の誘殺が認められています。

他県においては、トマト施設での育苗中の苗や定植後のトマトでの食害が複数の県で確認されており、食害が進むと、生長点の枯死も認められる場合もあるとのことです。

現在のところ、本県での農作物での発生および被害は認められていませんが、今後の本虫の発生に注意し、圃場をよく観察してください。

なお、本虫のハウス内への侵入を防ぐためには、ハウス開口部に防虫ネット（目合い0.8mm以下）を設置することが効果的です。

トマトキバガの発生が疑われた場合は、最寄りの農業改良普及センター、病虫害防除所に連絡してください。
(令和5年10月24日発表 病虫害発生予察特殊報 第1号 参照)

[トマトでの被害の特徴]

- ① 茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の被害は、ハモグリバエ類の食害痕と類似するが、ハモグリバエ類は線状に痕を残すのに対し、トマトキバガは面的に食害する。トマトキバガの食害部分は表面のみを残した薄皮の袋状になり、葉の裏面からでも透けて見える（写真1）。
- ② 果実では幼虫が食入し内部を加害し、数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分が腐敗する（写真2）。



写真1 トマトキバガ幼虫による被害葉



写真2 トマトキバガ幼虫によるトマト果実の食害

(写真1、2は、農林水産省植物防疫所原図)

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：－	9 月下旬現在、葉における発生は平年よりやや多い。落葉前の秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるため、落葉を適切に処理する。
	ハダニ類	発生量：－	9 月下旬現在、平年よりやや多い～多い発生である。
ブドウ	べと病	発生量：－	9 月下旬現在、平年並の発生である。病原菌の越冬を防ぐため、落葉処理を徹底する。
	褐斑病	発生量：－	9 月下旬現在、平年よりやや多い～多い発生である。罹病葉は翌年の伝染源となるため、落葉処理を徹底する。病原菌の越冬を防ぐため、結果母枝等は剪定時に取り除き、適切に処分する。
果樹共通	果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ等)	発生量：平年並～やや多い	直近 1 か月間 (8 月 16 日～9 月 15 日) の予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、水戸市で平年並～やや多く、笠間市およびかすみがうら市で平年並である。今後、収穫期を迎えるカキやリンゴ等の圃場では、果樹カメムシ類が飛来するおそれがあるので注意する。
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	9 月下旬現在、平年並の発生である。
	アブラムシ類	発生量：平年並～やや多い	9 月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	コナジラミ類		
ハクサイ	チョウ目幼虫	発生量：やや多い	9 月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
共通害虫	ハスモンヨトウ	発生量：－	9 月下旬現在、直近 1 か月間 (8 月 26 日～9 月 25 日) のフェロモントラップへの誘殺数は、鉾田市で平年よりやや多く、筑西市で平年並、土浦市および龍ヶ崎市で平年より少ない。一部圃場で発生を認めている。

サツマイモ基腐病の防除対策（収穫期～貯蔵期）

1. 収穫の準備

- ・使用するコンテナ等は、洗浄して土を完全に落としたうえで、資材消毒剤で消毒する。
※消毒後は水洗いし、よく乾燥させる。
- ・収穫前に必ず圃場をよく観察し、①生育不良、②株元の黒変を伴う葉の変色、③枯死株等の異常がないか確認する。

2. 収穫から貯蔵中の対応

【収穫時の対応】

- ・収穫したイモは、後からどこの圃場で生産されたものか追跡できるよう、圃場名を記録しておく。
また、収穫したイモは圃場ごとに管理する。
- ・なりつるの黒変、イモのなり首側からの変色や腐敗がないか、イモから芽が出ていないか（萌芽）等に注意する。
- ・他の圃場で作業する前には、農機具や長靴についた土は良く落とし、水できれいに洗浄する。
※コンテナや農機具、長靴等の洗浄は、圃場の近くでは行わない。

【収穫時に発病が疑われる株を見つけた場合】

- ・収穫時に疑わしい症状を見つけた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまで連絡する。
- ・普及センターが確認するまで、株の抜き取りは行わず、圃場に入らないこと。

【貯蔵中の対応】

- ・貯蔵中のイモは月に1回程度、異常がないか確認する。
- ・貯蔵中に疑わしい症状のイモを見つけた場合、そのイモを貯蔵しているコンテナを隔離する。
- ・貯蔵中、疑わしい症状を見つけた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターまで連絡する。

3. 次作に向けた準備

- ・収穫終了後の残さ（イモ、葉や茎の残がい）はできるだけ持ち出し、適切に処分する。
- ・収穫後速やかに、圃場を丁寧に耕うんし、残された残さを細かく粉砕する。
- ・圃場に停滞水が生じないように、排水対策（収穫後の耕盤破碎等）を行う。

茨城県総合防除計画におけるサツマイモ基腐病の遵守事項

茨城県では、全国的に発生しているサツマイモ基腐病について、すべての農業者（家庭菜園を含む）の皆様に守っていただくルール（遵守事項）を定めました（令和5年4月1日に施行された改正植物防疫法に基づくものです）。

○遵守すべき事項

- ・県が実施するまん延防止のための調査に協力する。
- ・本病の発生を確認した場合には、関係機関へ連絡し、関係機関の指導の下、発病株を抜き取り、圃場（苗床を含む）外に持ち出す。
- ・本病発生圃場では、2年間、サツマイモを作付けしない（関係機関の指導の下、栽培管理する場合を除く）。
- ・本病発生圃場から種イモを採取しない。
- ・本病発生圃場では、発生の拡大が無いことを確認する。

県内の調査圃場（57 圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稻における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

1. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し、4 月上旬頃に羽化して麦畑へ移動、増殖した後、6 月上旬頃に成虫が本田に飛来する。水稻は、イネ縞葉枯ウイルス（以下、RSV）を保毒したヒメトビウンカに吸汁されると RSV に感染し、発病する。発病後に治療はできないため、ヒメトビウンカを防除して、感染の機会を減らすことが重要である。

[本年の発生状況]

8 月上旬調査では、県北地域を除く県内全域で本病の発生を確認し、県西地域の発生地点率は、引き続き高い傾向であった（図 1）。なお、本年の調査期間全体でみると、県北を含む県内全域で本病の発生を確認した。県西地域の発病株率は、発生が多かった平成 26 年～令和元年と比較すると低く、令和 2～5 年と同程度であった（図 2）。

県西地域以外では、発生地点率及び発病株率は、鹿行地域で平年よりやや高く、県央・県南地域で平年並、県北地域で平年並～やや少なかった（図 1、2）。

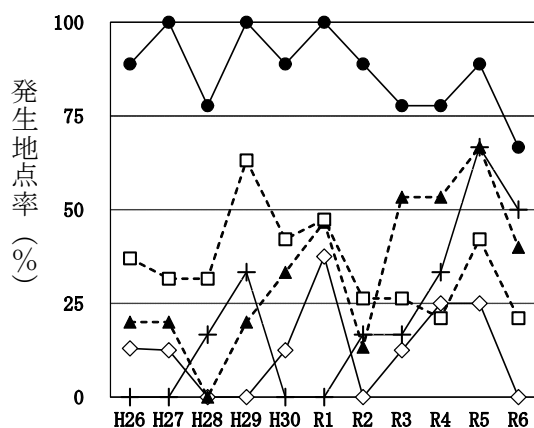


図 1 イネ縞葉枯病の発生地点率の年次推移
(8 月上旬)

※県北 8 地点、県央 15 地点、鹿行 6 地点、県南 19 地点、県西 9 地点調査。

※R3～5 は、県央、県西各 1 地点、R6 は県央、県南、県西各 1 地点において、縞葉枯病抵抗性品種作付ほ場で調査を行った。

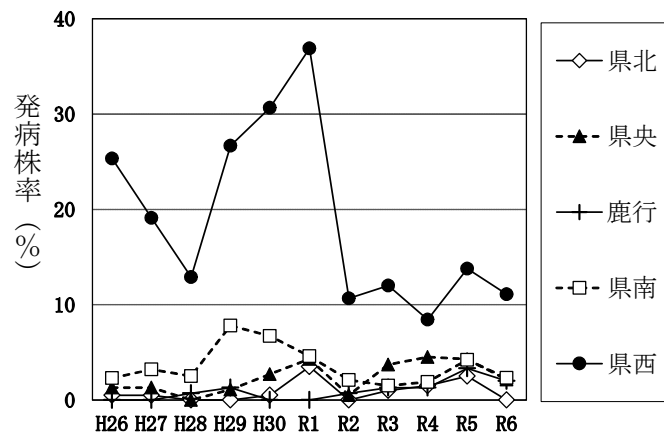


図 2 イネ縞葉枯病の発病株率の年次推移
(8 月上旬)

[次作に向けた対応]

- ① RSV を保毒したヒメトビウンカが翌年の感染源となる。ひこばえ（再生稲）は、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株である場合、ヒメトビウンカの保毒虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する。
- ② 畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。
- ③ 近年発生の多い地域では、ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施用剤を使用するとともに、本田防除の実施を検討する。
- ④ 縞葉枯病抵抗性品種はほとんど発病せず、保毒虫率を徐々に下げる効果が期待できるため、抵抗性品種の導入を積極的に検討する。

2. 紋枯病

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核で越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。

[本年の発生経過]

7月上旬に発生を確認した後、7、8月の気温が平年より高く、8月下旬には県内の広い範囲で認められ、平年よりやや多い発生であった。

[次作に向けた対応]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除く。
- ② 常発地では、本病を対象とした育苗箱施用剤を使用する。
- ③ 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

3. いもち病

前年の籾や被害わらで越冬して伝染源となり、低温・日照不足・多湿等の気象条件で発生が助長される病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の6月中下旬から発生し始め、7月に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちの発生が多くなる。

[本年の発生経過]

葉いもち感染好適条件や準感染好適条件（BLASTAM※による）の出現は、7月第2～4半旬および第6半旬にかけて、県内広域で複数回が認められた。葉いもちの発生は、6月下旬～8月上旬にかけて、平年並～やや少なく推移した。一部圃場では、上位葉での発生が認められた。穂いもちは、8月下旬から9月上旬にかけて、平年並～やや多い発生が認められた。

※ BLASTAM：アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム

[次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し、未消毒の種子を使用する場合は種子消毒を行う。
- ② 常発地では、本病を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

4. 斑点米カメムシ類（イネカメムシ、クモヘリカメムシ、アカスジカスミカメ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。

[本年の発生経過]

- ① 7～8月に水田内で斑点米カメムシ類のすくい取り調査を行った結果、本年は虫数、発生地点率ともに平年を上回る値で推移した（図3）。
- ② 発生地点率が最も高かった8月下旬調査では、イネカメムシが最も多く、虫数（本年値0.96頭、平年値0.44頭）は平年よりやや多い～多く、発生地点率（本年値32%、平年値20%）は平年よりやや高かった。クモヘリカメムシは虫数（本年値0.63頭、平年値1.26頭）、発生地点率（本年値26%、平年値31%）ともに平年並であった。
- ③ 8月上旬・下旬の調査において、本年、イネカメムシの発生が多かった地域は県央、県南および県西地域であったが、県北地域でも確認されており、本種は県内全域で発生していた。

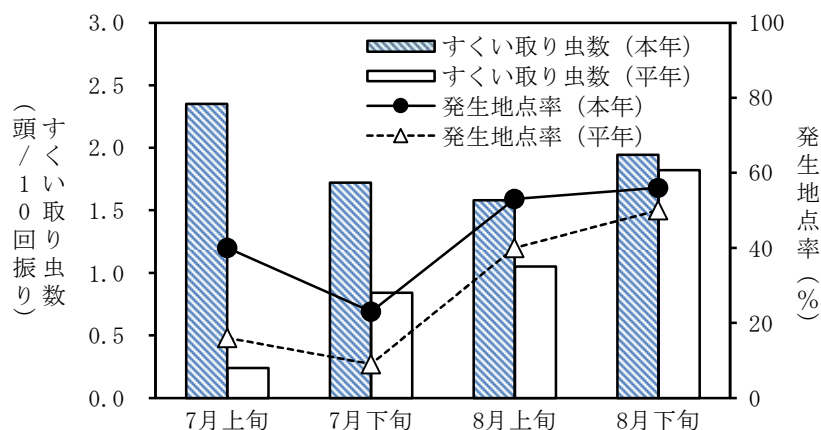


図3 水田内における斑点米カメムシ類捕獲の推移
(平年：平成26年～令和5年の平均)

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 9 月 28 日から 10 月 27 日)

気象庁 (9 月 26 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
	気温	関東甲信全域	10	10	80
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平日に比べ晴れの日が少ないでしょう。
期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

< 1 週目の予報 > 9 月 28 日 (土曜日) から 10 月 4 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 2 週目の予報 > 10 月 5 日 (土曜日) から 10 月 11 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 80%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 10 月 12 日 (土曜日) から 10 月 25 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 70%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類（FRAC コード、IRAC コード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。